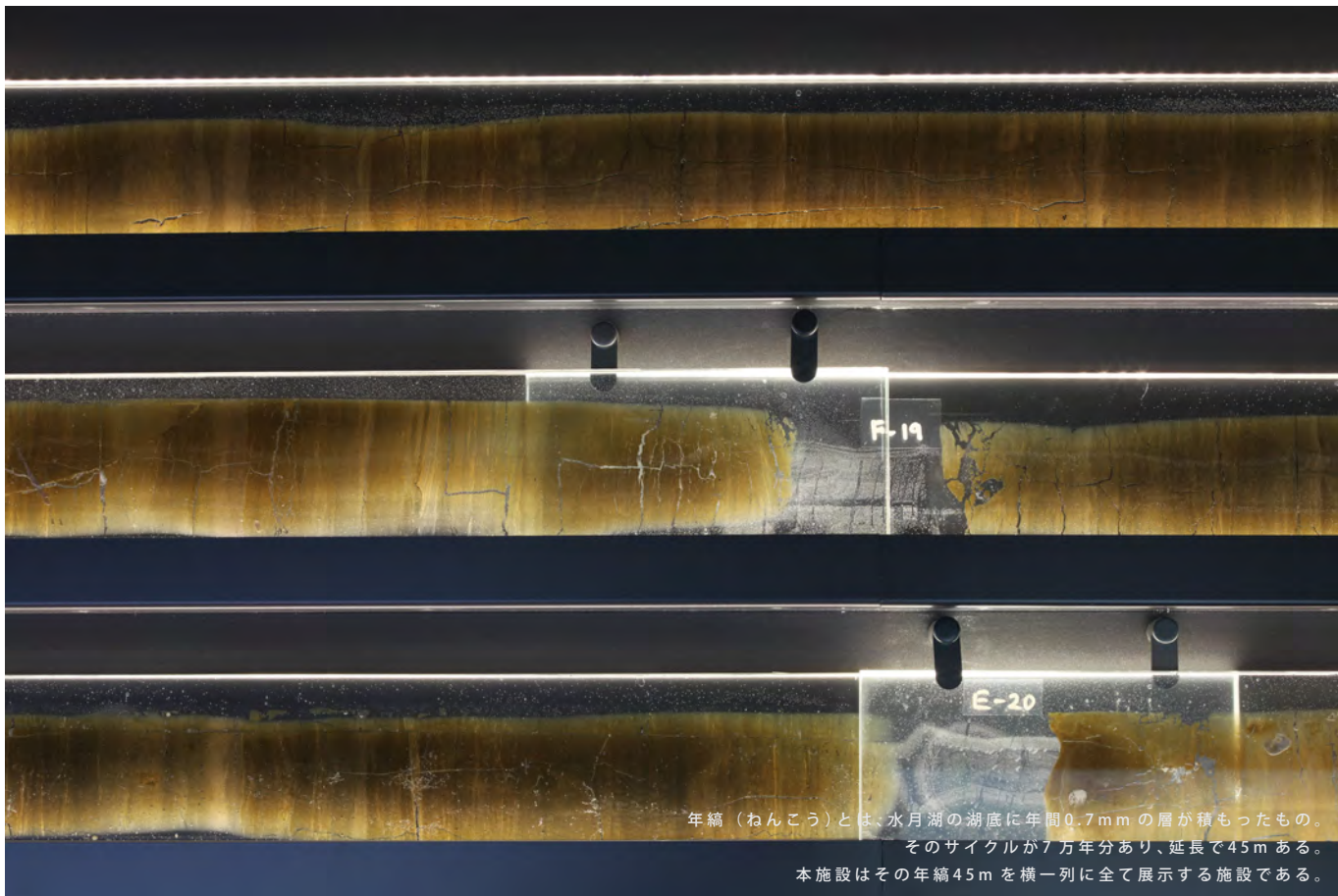


福井県年縞博物館

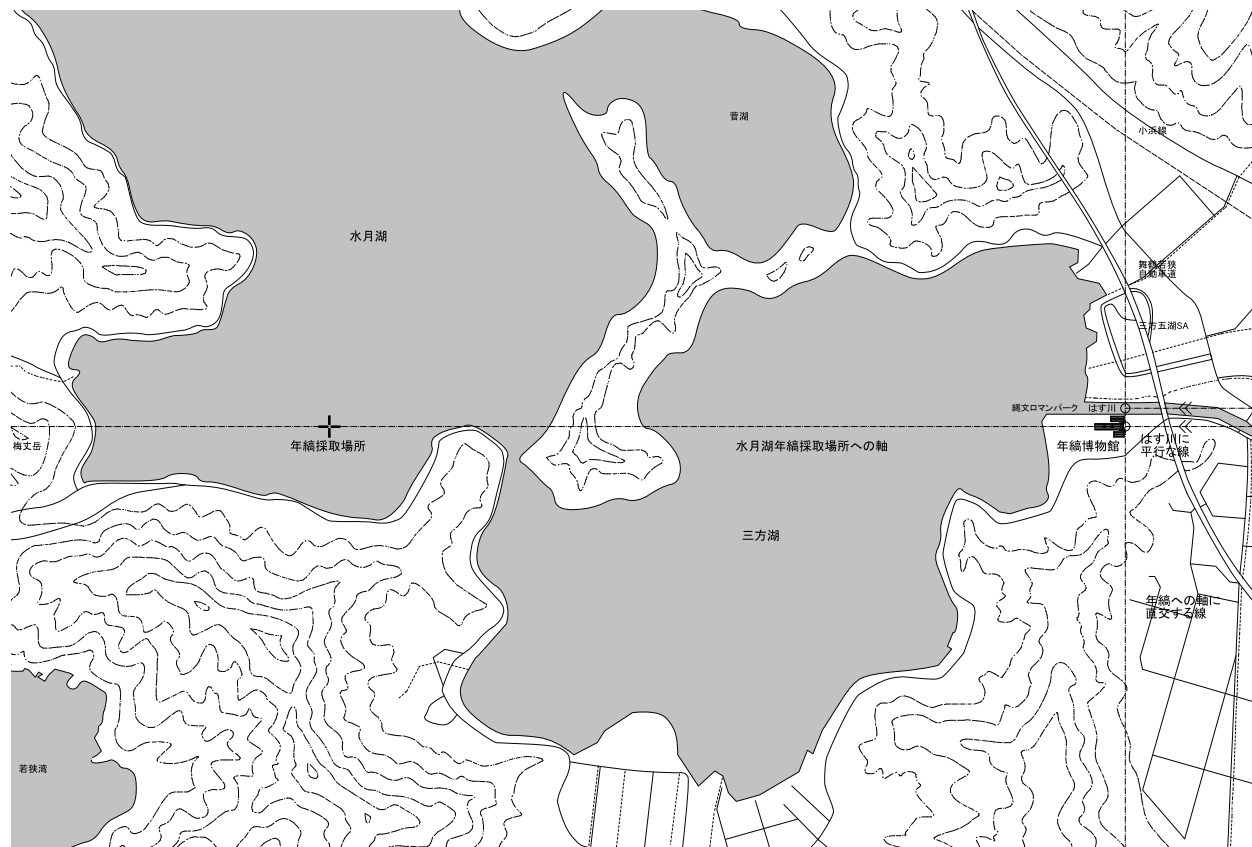


—— 水月湖の年縞の発見・研究により、歴史学・考古学・地質学における年代測定の精度は飛躍的に向上した。
本事業は年代測定における世界標準の「ものさし」として、世界に誇る地域資源である年縞の普及や研究の拠点施設の整備を行うものであり、
本施設では年縞の実物や研究成果を分かりやすく展示し、その価値を国内外に広く発信するとともに、
立命館大学との共同研究により、年縞の学術的価値の向上を進めている。
また、年縞を地域ブランドとして活用し、観光や教育旅行の推進、関連商品の開発など地域の活性化に繋げている。



年縞（ねんこう）とは、水月湖の湖底に年間0.7mmの層が積もったもの。
そのサイクルが7万年分あり、延長で45mある。

本施設はその年縞45mを横一列に全て展示する施設である。



水月湖・はす川を軸として、展示棟と両脇に研究棟を2棟を直線的に配置している。



全体配置図 S=1/20,000

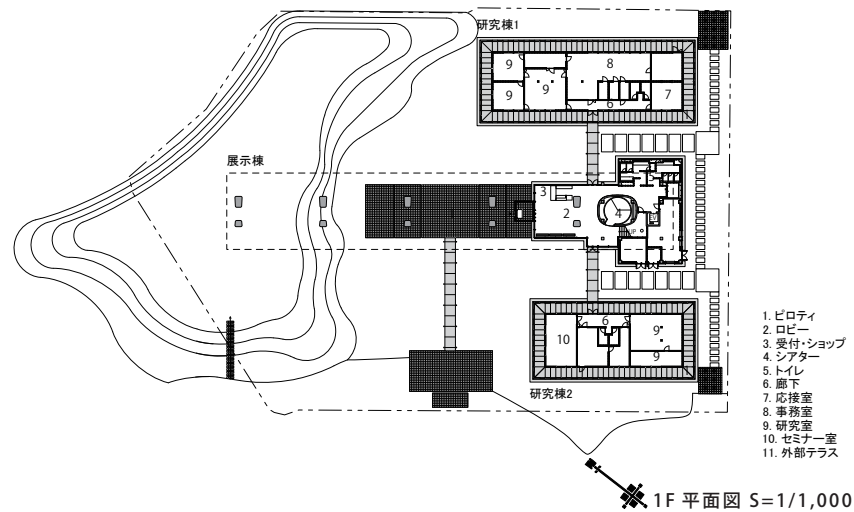
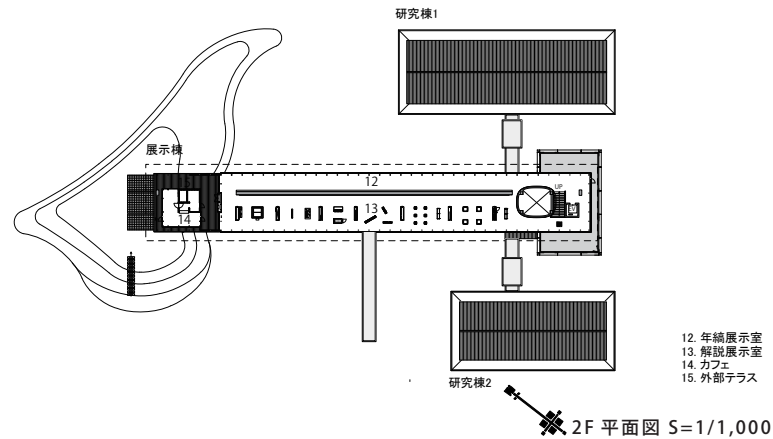


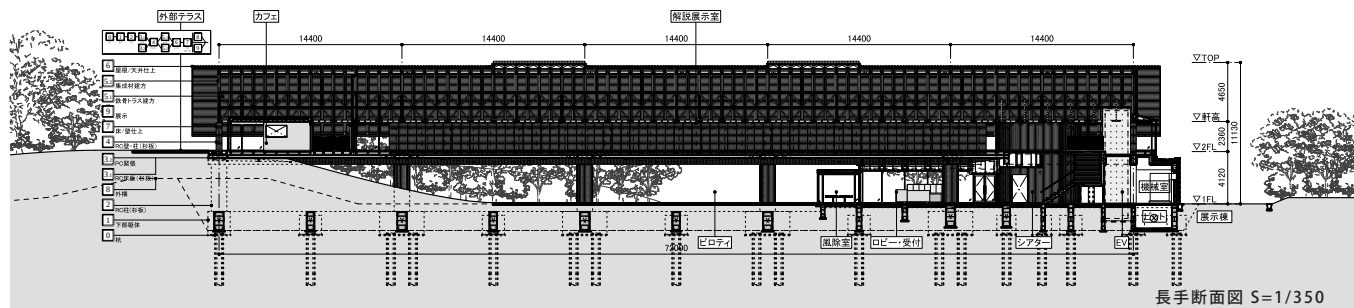
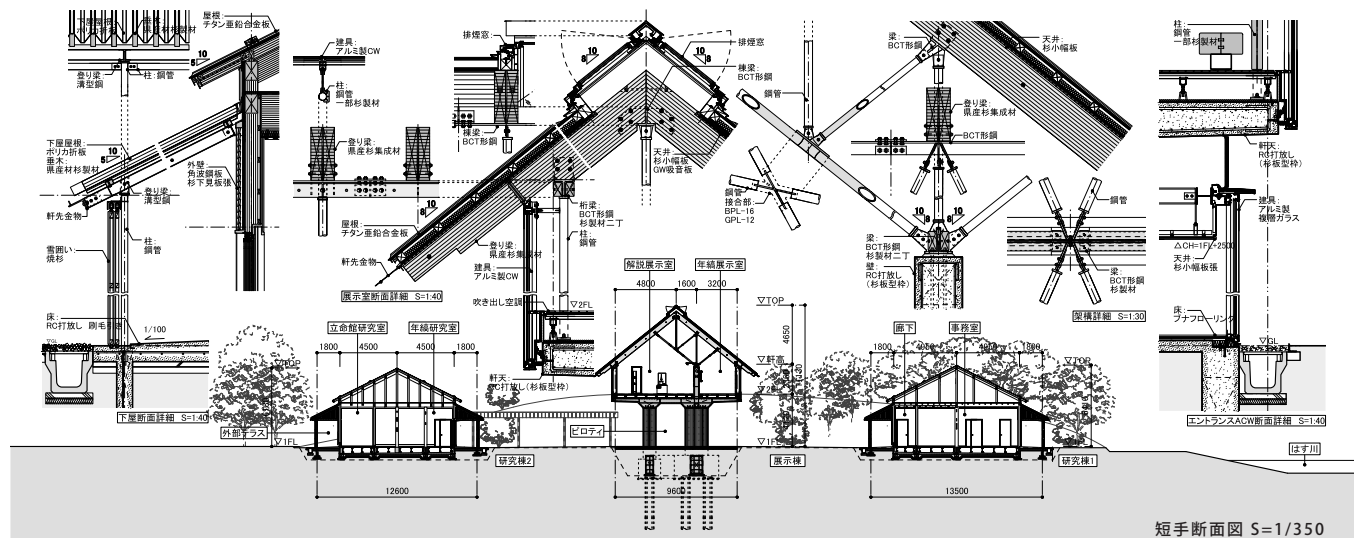
周辺は水害の懸念があるため、展示室は2階に設け、1階部分はヒロディ形状としている。
福井県南地方の過酷な外部環境（積雪量1.75m、軟弱地盤）に対処するため適材適所の構造計画とした。

展示棟は基礎部分をRC+ホストテンション（60m）+摩擦杭（30m）。

上部を鉄骨トラス、屋根面を福井県産スギの集成材とした。

研究棟は木造とし、外周部は冬場での作業ができるよう鉄骨造のポリカーボネート屋根の下屋、焼スギの雪囲いを設けている。







本施設は地元の工務店・職人による施工であり、風土や地場産材に精通した地元密着型。

地元を心にかける訳にはいかないという気概で、丹精込めて施工に臨んだ。

特に密実なコンクリートを実現するため、型枠を原寸図やモックアップを作成しながら議論を進め、打設の際には竹串を突きながら打設を実施した。

建て方の際には、RC（一部、ポストテンション）・鉄骨・木とそれぞれ精度管理の違う反復する材を使用していたためどの工種をとっても、

数ミリ単位の誤差を許さない非常に緊張感のある施工であった。



2 階部分はマウンドにランディングさせ、1 階部分はピロティとすることで、ランドスケープとの一体性・連続性を生み出している。
また、展示室は外に大きく開いたガラスのカーテンウォールとし内部と外部との関係性を生み出している。



1階とロビー部
RC部分は杉板型枠とし人との親和性を生み出している。



福井県産スギで仕上げた丸みを帯びたシアター外周の階段を上かると、展示エリアに接続する。



45mの展示壁に7万年分の年縞（実物）を展示している。
展示室は全面開口とし、外部の里山の風景も展示の一環として関係性を持たせている。
空調は床吹き出し（床下チャンパー形式）を採用し、設備機器が内部に出ない形式とした。
それによって、年縞そのものに集中できる空間を実現した。



展示室は年輪の実物展示とその解説展示（アーカイブ空間）の2面性を45mの展示壁を介して分節している。
展示壁を偏心させることで、それぞれの展示室の特徴を生み出すとともに、建築全体の特徴になっている。



年縞展示室に対して、その解説の場としての展示室
併設の研究所における、研究内容を取り入れた生きたアーカイブ空間。



2階マウンド部分にはカフェを併設し、展示室からのアクセスや外部からのアクセスを可能にしている。
構造を中心軸から偏心させることによって外部にも特徴的な印象を生み出している。



特にRC・ガラスカーテンウォール・木梁・軒先金物との



建築の全体計画とともにディテールの密度にもこだわり、
型枠の取り合いについて、型枠に至るまで原寸検討を重ねながら設計を進めた。
施工時には、原寸のモックアップを作成し細部まで神経を張り巡らせた。



研究棟は若狭町の
屋根はポリ



ローカルな風景に呼応するように、季節によって出し入れされる雪囲いを設けた。
ネートの折半とし、福井県産スギの垂木に直接とめつけるディテールとしている。



本施設は年縞という福井県の宝を単に研究・展示するだけではなく、
福井県や設計者・施工者をはじめ、地元自治体や住民と共に創り上げたものである。

県民が地元の文化や技術に誇りを持てる博物館、
博物館がヒトや里山里海湖の自然環境と融合した開かれた博物館として、一つの新たな方向性を目指した。